

明代通俗小説に描かれた悪僧説話の由来

——仏教における「戒律」と「淫」の問題を手掛かりに——

林 雅 清

中国明代の通俗小説には、「淫僧」を中心とした悪僧の話が目立つ。悪僧説話が多い理由について、仏教界の墮落という当時の社会背景に由来するという説や、読者層の興味に由来するという説などがすでに唱えられているが、なぜ「淫僧」が多いのかという議論は少ない。本稿では、仏教の「戒」や「律」における「淫」の扱いを取り上げながら、「淫僧」の多い明代通俗小説に描かれた悪僧説話の由来について考える。

キーワード：中国明代、通俗小説、悪僧、淫、戒律

一 はじめに

中国の通俗文学、ことに明代通俗小説には、悪僧^{〔1〕}や破戒僧の説話が数多くみられる。中でも、邪淫を犯す「淫僧」の話は群を抜いて多い。人妻と不義密通する僧侶の話や、女性を寺に監禁して姦淫する僧侶の話、姦淫を迫って拒んだ女性を殺す僧侶の話など、枚挙に遑がない。一体なぜ、悪僧説話、とりわけ「淫僧」の類話がこれほど多いのか。また、どうしてそれが「仏教僧」でなければならぬのか。

宋代以降、特に明代の中国社会においては、度牒の濫発や売牒の横行などによる仏教界の墮落が目立っており、その社会背景が悪僧説話の多さに表れたのだと考える説がある。反対に、多くの悪僧説話に描かれているような僧侶の悪行が実際に頻発していた

とは考え難く、それは読者の興味に由来するのだという説もある。ただ、なぜ悪僧説話には「淫僧」の話が多いのか、なぜ「五戒」のうち邪淫を犯す僧侶が特に批判の対象として描かれるのか、その説明はなされていない。そこで本稿では、これらの疑問を解消するための一視点として、仏教における「戒律」と「淫」の関係に鑑みながら、明代通俗文学における悪僧説話の由来について考えてみたい。

二 悪僧説話の具体例

まずは悪僧説話の具体例を、『水滸伝』や公案小説、「三言二拍」、そして『僧尼孽海』といった、明代通俗小説の中から挙げておく。

(一) 『水滸伝』に登場する悪僧たち

明代前期に成立したとされる長篇白話小説『水滸伝』には、魯智深・崔道成・裴如海という、悪僧と呼べる主要人物が三人登場する。

一人目の魯智深は、悪僧は悪僧でも「悪事」を働かない「好ましき悪僧」である。酒は飲むし肉は食らうし、盗みや殺しまでする、乱暴者の破戒僧ではあるが、不義を憎む豪傑で、特に「淫」は徹底的に嫌う。その行為が義侠心に基づく「好漢」の行い⁽²⁾であれば、『水滸伝』においては「悪事」とは見なされない。よって、「好漢」の典型である魯智深の破戒行為は「悪」ではなく、魯智深は「悪い僧侶」ではない。

それに引き替え、二人目の崔道成は、瓦罐寺という寺院を力づくで占拠し、若い女をかどわかしてきて酒盛りをするという、根っからの「悪僧」である。『水滸伝』の第六回、崔道成とその相棒の丘小乙の二人を非難した瓦罐寺旧住の老僧たちの言葉に、「その雲水と道人はとんでもない野郎でして、どちらも殺しに火付けを平気でやるようなやつらです」、「この二人はとても出家などには見えませぬ。まるで山賊同然、ただ出家の格好をしているだけなのです⁽³⁾」とあるように、崔道成らは正式な僧侶ではなく、ただの犯罪者なのである。

崔道成がいかに悪人面をした似非雲水として描かれているのに対し、三人目の裴如海は、れつきとした大寺院の僧侶で、かつ、若くて顔も声もよい色男として描かれている。

その坊主の妖しい光をたたえた両の目は、ただ施主のたおやかな娘を追うばかり。この禿げ頭の口から出てくる甘く美しいお言葉は、専らうら若き寡婦を口説くため。ひとたび色情発すれば、庵に尼僧を求めに行き、情欲抑え難ければ、方丈

の内に小僧を求む。空を仰いで天女と同衾したいと願い、月眺めては嫦娥と交歓したいと欲す。⁽⁴⁾（『水滸伝』第四十五回）

登場の段階で、裴如海がどのような僧侶であるかが一目瞭然である。実際、裴如海は楊雄の妻潘巧雲と寺で密通し、楊雄の留守中には家に入りこんで潘巧雲と同衾するという、典型的な「淫僧」である。

悪僧を広義に解釈すれば、破戒行為を平然と行う魯智深も悪僧にほかならず、悪僧の日本的解釈⁽⁵⁾に従えば、本稿で取り上げる「淫僧」よりもむしろ、弁慶などのイメージに近い魯智深のほうが悪僧という言葉に相応しいかもしれない。「悪僧説話」を論じるには、このような「好ましき悪僧」についても検討すべきであるが、魯智深のような破戒僧の類話についてはかつて論じたため⁽⁶⁾、本稿では割愛する。

(二) 公案小説における悪僧説話

公案小説には、以下①から⑫までの悪僧の類話が確認できる。

① 寺にきた女性を強姦する僧侶の話

『龍図公案』巻之一「観音菩薩托夢」、『廉明公案』下巻威逼類「邵参政夢鐘蓋黒龍」

② 女性に淫行を迫って拒否されたため女を殺す僧侶の話

『龍図公案』巻之一「阿弥陀仏講和」、巻之四「三宝殿」、『廉明公案』上巻人命類「張県尹計嚇凶僧」、『明鏡公案』巻之一人命類「周按院判僧殺婦」、『詳情公案』巻之四人命門「判僧殺婦」、『居官公案』巻之一第二回「僧徒奸婦」、巻之四第六十三回「判奸僧殺妓開積倉際拳」

③ 女性に淫行を迫って自害に追い込む僧侶の話

『龍図公案』卷之三「売真靴」・卷之十「三官経」、『百家公案』卷之五第四十五回「除悪僧理素氏冤」、『律条公案』四卷淫僧類「晏代巡夢黄龍盤柱」、『詳情公案』卷之三威逼門「夢黄龍盤柱」

④ 複数の女性をかどわかしてきて寺に監禁し、姦淫する僧侶の話

『龍図公案』卷之九「桷上得穴」、『廉明公案』下卷威逼類「康総兵救出威逼」、『律条公案』四卷淫僧類「曾主事断淫僧拐婦」、『詳情公案』卷之三姦拐門「断和尚奸婦」、『居官公案』卷之二第三十回「撃僧除姦」

⑤ 子宝祈願にきた女性を寺に参籠させ、姦淫する僧侶の話

『廉明公案』上卷姦情類「汪県令烧毁淫寺」、『律条公案』四卷淫僧類「蔡府尹断和尚姦婦」

⑥ 人妻をかどわかしてきて僧形をさせ、ともに旅をする僧侶の話

『龍図公案』卷之九「和尚皺眉」・「西瓜開花」、『廉明公案』下卷拐带類「載典史夢和尚皺眉」・「黄通府夢西瓜開花」、『律条公案』四卷淫僧類「張判府除遊僧拐婦」、『詳情公案』卷之三姦拐門「除遊僧拐婦」

⑦ 姦計を用い人妻を離縁させ、還俗してその女性と結婚する僧侶の話

『龍図公案』卷之二「偷鞋」・「烘衣」、『百家公案』卷之三第二十回「伸蘭嫖冤捉和尚」・卷之六第五十六回「杖奸僧決配遠方」、『居官公案』卷之二第三十九回「捉凹通伸蘭嫖之冤」

⑧ 度牒を買い、昼間だけ出家の姿をして財を蓄える僧侶の話

『明鏡公案』卷之一索騙類「崔按院搜僧積財」、『詳情公案』卷之四索騙門「搜僧積財」

⑨ 妖怪とともに人びとを苦しめる僧侶の話

『居官公案』卷之二第三十四回「断問猴精」

⑩ 幻術を使って金を集める僧侶の話

『百家公案』卷之四第四十一回「妖僧感撰善王錢」

⑪ 闇の塩によって儲ける僧侶の話

『皇明諸司公案』四卷詐偽類「武大府判僧藏塩」

⑫ 冤罪で姦通罪をかけられる僧侶の話

『龍図公案』卷之三「殺仮僧」、『百家公案』卷之四第三十六回「孫寛謀殺董順婦」、『居官公案』卷之二第四十三回「通奸私逃謀殺婦」

①から⑦までが「淫僧」の話、⑧から⑫までが、「淫僧」以外の「悪僧」の話、⑬は「淫僧」と誤解される僧侶の話である。「淫僧」の話が圧倒的に多いことが看取できる。なお、『律条公案』においては、特に「淫僧類」という一項目を立てて、「淫僧」の類話を収めている。

(三)「三言二拍」の中の悪僧説話

明末に馮夢龍や凌蒙初によって編纂された、擬話本形式の短編白話小説集「三言」（『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』）や「二拍」（『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』）には、僧侶や尼僧が登場する物語が「入話」（まくらとなる話）を含めると二十話ほどあるが、そのうち悪僧が主要登場人物となる「悪僧説話」としては、次の十五話が挙げられる。

『古今小説』（『諭世明言』）

○第三卷「新橋市韓五売春情」Ⅱ色戒を犯して墮獄した僧侶の霊

の話。

○第二十九卷「月明和高度柳翠」 妓女の姦計で色戒を破る高僧の話。

○第三十卷「明悟禪師趕五戒」 迷いが生じて色戒を破る高僧の話。

○第三十五卷「簡帖僧巧騙皇甫妻」 姦計を用いて離縁させた人妻と結婚する僧侶の話。

『警世通言』

○第七卷「陳可常端陽仙花」 郡王の歌姫を妊娠させたと誤解される罰せられる出家書生の話。

『醒世恒言』

○第十五卷「赫大卿遺恨鴛鴦絲」 士人や小僧を寺に困って情事に耽る尼僧たちの話。

○第二十二卷「張淑兒巧智脫楊生」 宿泊した寺の僧侶たちに身包みはがされ殺されそうになる書生の話。

○第三十九卷「汪大尹火焚宝蓮寺」 子授け祈願のために参籠する女たちを菩薩や羅漢と称して凌辱していた僧侶たちの話。

○々々(入話) 街で出会った女と密通しようとする夢を見た僧侶の話。

『拍案驚奇』(『初刻拍案驚奇』)

○卷十五「衛朝奉狼心盤貴産 陳秀才巧計賺原房」(入話) 借金に形に僧侶に取り上げられた友人の家を取り戻す義侠の話。

○卷二十六「奪風情村婦捐軀 仮天語幕僚断獄」 人妻を寺に引き留め姦通する若い僧侶と、その人妻に相手にされなかったた

め殺してしまう年配の僧侶の話。

○々々(入話) 寺に複数の女を監禁していた僧侶の話。

○卷三十四「聞人生野戰翠浮庵 静観尼昼錦黄沙術」 書生と情を通じ寺で愛欲の日々を過ごす尼僧の話。

○々々(入話) 近隣の婦女をかどわかして寺で淫事に耽る両性具有の僧侶と尼僧たちの話。

『二刻拍案驚奇』

○卷之三十六「王漁翁捨鏡崇三宝 白水僧盜物喪双生」 持つと裕福になる鏡を喜捨された寺の僧侶たちがその鏡を独占する話。⁹⁾

一見してわかるように、「三言二拍」に採録された悪僧説話のほとんどが、「淫僧」の話なのである。

(四) 『淫僧説話』の集大成——『僧尼孽海』

ここでもう一種、『僧尼孽海』⁹⁾という短篇小説集を挙げておく。これは、公案小説や「三言二拍」、「西湖遊覧志余」などから「淫僧」の話だけを集めた、扇情的な描写の多い作品集で、僧編に三十二話、尼僧編に十一話が収められている。「南陵風魔解元唐伯虎選輯」という署名があり、撰者は唐寅と考えられるが、孫楷第氏の分析によると、どうやら別人の偽編のようである。¹⁰⁾

『僧尼孽海』に採録されている話の内容、すなわち僧侶や尼僧の淫行は、おおよそ以下の十種類に分類される。

一 夫人や娘、あるいは妓女と関係する

二 寡婦を誘惑して犯す

三 尼に化けて婦女を犯す

四 夫人を騙して奪う

五 宮中に招かれ、太后、皇后と交わる

六 婦女を脅して寺に引つ張り込み、犯す

七 子供を授かりたくてお参りにやってきた婦人を、仏に化けて犯す

八 皇帝に房中術を教え、宮中で女官たちと関係する

九 僧と尼が関係する。さらに尼が夫人や娘を誘い、僧に取り持つ

十 尼が寂しさに堪えかね、庵に男を入れて住ませる。あるいは外部の男と通じる¹⁾

女性を誘拐して寺に監禁し、日々姦淫を強要する僧侶の行為などは非常に悪辣で、このような事件が実際にあったとは思いたくないが、僧侶の淫行がリアリティ溢れる筆致で描かれており、類話も多いことから、これら「淫僧」の凶行が単なる絵空事とは考えられない。

三 悪僧説話の由来

中国明代の通俗小説である『水滸伝』、公案小説、『三言二拍』、『僧尼孽海』に描かれた悪僧説話を列挙してきたが、なぜこれほどまでに明代の通俗小説には悪僧説話、とりわけ「淫僧」の物語が多いのか。その要因や由来を述べた従来の説を、いくつか紹介する。

(一) 歴史的事実に由来するという説

まず、当時の歴史的事実として、実際に悪僧説話に描かれてい

るような僧侶が多く存在し、僧侶の犯罪が横行していたことに由来するという説に、次の三者がある。

A 池田正子『龍図公案』類話考』（『中国文学研究』第四期、一九七八）

B 莊司格一「明代公案小説における僧尼説話について」（『加賀博士退官記念中国文史哲論集』、講談社、一九七九）

C 井波律子『蕩尽の世界』（『中国のグロテスク・リアリズム』、平凡社、一九九二）

Aでは、公案小説『龍図公案』巻二「偷鞋」の話について、「『夷堅志』に収められた宋代の実話「王武功妻」の事件を下敷にしたものである」とし、「美しい人妻がこともあろうに仏に仕える僧に横恋慕され、謀られて弄ばれ、自害したというこの実話は、当時の人びとにとってかなり衝撃的な事件であつたらしく、僧の墮落に対する批判をこめて劇に仕組まれ、小説にも作られ」と説明している。

Bの莊司氏は、同じく公案小説に関して、多くの悪僧説話が生み出された背景を、牧田諦亮『アジア仏教史（中国編Ⅱ）——民衆の仏教』（佼成出版社、一九七六）を引いた上で以下のように解説している。

洪武五年（一三七二）の統計によれば、僧侶道士をふくめて、度牒を給与した数は五七、二〇〇人に達し、翌六年には九六、三二八人を数えたという。さらに憲宗の成化二二年（一四八六）には僧道三二万人に度牒を給しているから、いかに仏教教団が膨大であつたかが知られるであろう。このこ

とは同時に多くの問題をはらんでいた。政府自体が安易に度牒を給したりしたため、犯罪者が仮に僧形をつくって寺にはいるものが多かったこともそのひとつである。……（中略）
 ……このような僧侶の資質の低下は、民衆の仏教信仰が現世利益的なものに重点がおかれるといよいよその傾向ははなはだしくなる。このため私度を禁止する法令がしばしば発せられたというが、そのことはその禁令が有効ではなかったことを意味するであろう。このような明代の仏教界を背景にかか
 る僧尼説話は生みだされたのである。

「犯罪者が仮に僧形をつくって……」というのは、金で度牒を買ったり、あるいは度牒を奪ったりして出家のふりをする者がいたということである。先に挙げた『水滸伝』の崔道成などもその類であろう。このような偽坊主が出現したのは、出家すると世法から逃れられる、すなわち、いかなる罪を犯しても度牒を手に入れた僧侶となれば捕縛されずに済むという事実があったことが原因⁽¹⁾といふ。度牒が一種の免罪符の役割を果たしていたのである⁽²⁾。

Bではさらに、「明代の刊行とされる七種の公案小説における僧尼説話」のほとんどが、「僧が加害者であり、殺人、婦女誘拐、脅迫などの罪を犯す話」、つまり悪僧説話であり、「同一の犯罪が二書あるいは三書に記され、あるいは動機をおなじくする犯罪も見られることは、あるいはそうした事実が現実にあつて記録されたことをおもわせる」と結論づけている。

Cの井波氏は、「三言」中の悪僧説話について次のように述べている。

「三言」に登場する僧侶の多くは、精力絶倫の好色の権化か、強盜殺人も辞さないような悪僧と、相場がきまつている。……（中略）……「三言」の背景となる時代、ことに濃厚なデカダンスに浸された明末には、さしもの「三言」も顔負けなほど、頹廢しきつた尼僧や僧侶も、実際多かつたのだが。……（中略）……明代には、「ひとりが出家すれば十人の女が淫せられ、一方に寺があれば、四方が淫せられる」という民間歌謡があつた。ことほどさように、特権階級化した一部僧侶の墮落ぶりには言語を絶するものがあり、そうした事実を極端化して、明末には、こうしたエロの権化の悪僧を主人公とする物語が数多く生み出された。

幾分の「極端化」はあるかもしれないが、明代の現実社会に「エロの権化の悪僧」が数多く実在したからこそ、「三言」などの通俗小説に面白おかしく描かれたということである。

(二) 読者層の意識や興味に由来するという説

次に、通俗小説の読者層の「仏教僧」に対する意識に由来するとする説、悪僧の話は人びとの興味を引くため描かれたとする説を挙げる。

D 横山伊勢雄「宋の「話本」における人間形象」(『国文学漢文学論叢』第二十輯、一九七五)

E 澤田瑞穂「宝蓮寺奸僧事件」(『宋明清小説叢考』、研文出版、一九八二)

F 侯会「魯智深形象源流考」(『首都師範大学学报(社会科学版)』一九九六年第二期)

Dでは、「無頼の「つけ文和尚」に対してはその最後を棒たたくまで死に至らしめるという冷たい筆致に終始している。『水滸伝』の花和尚魯智深と異なる陰湿な無頼に対する庶民の反発の現われであろう」としている。これは現実の「無頼」に対する読者層の「反発」ということであって、悪僧の实在を否定する説ではないが、ここでは「読者層の意識に由来する説」に分類しておく。

Eの澤田氏は、『醒世恒言』第三十九卷「汪大尹火焚宝蓮寺」の結末について、次のように述べている。

……詭計をもって寺僧の奸詐を暴いたまではよいが、その処罰として、当の淫僧はもとより全寺の僧を伽藍もろとも焼きつくしたというのは、定法による処分とは思われず、いかにも酷薄非道に見える。……（中略）……だがこれは事実を伝えるのではなく、仮構の物語として読者受けを狙った奇抜な趣向を立てたまでのことである。中国の読者はこれを読んで喝采し溜飲を下げる。というのは、昔の中国社会では、和尚というものが一般人からは尊敬と憎悪との両極端の感情をもつて見られていたからで、高僧伝や靈驗記など仏僧の作を別にすれば、中国の筆記・公案書・通俗小説では、僧を題材とするものの大半は悪僧物語であった。

「事実を伝えるのではなく……」と、歴史的事実の影響を明確に否定している。ただ、ここで否定されているのは悪僧の存在自体ではなく、悪僧説話に描かれた事件、もしくはその結末についてであるが。

Fの侯氏は、『水滸伝』において悪僧たちが活躍することにつ

いて、「一般民衆に興味があるのは、仏法の奥義でも、鋭い禅機でも、頭陀の苦行でもなく、僧侶の勇ましい戦いぶりや破戒悪行、淫欲の奔流である」³⁾と説明している。

(三) その他の説

その他、右の二説に分類できないものに、次の奥村氏の説がある。

G 奥村佳代子「僧侶が人妻を騙す話——短編小説の定型化と普遍化——」（『関西大学中国文学会紀要』第二十号、一九九九）

女性や金品に対する欲という形で表現されているものは、結局のところ、現世に対する執着心に他ならない。……（中略）……これほどの強い執着心を僧侶に託すことにより、人間というものの執着心の強さをひととき強調するとともに、この僧侶はすべての人間の中に潜む普遍的な存在であることを意味している。

「執着心」の塊である悪僧を抽象的に捉え、それを「人間の中に潜む普遍的な存在」とし、以下結論として、「僧侶という、もつとも執着心とは遠い存在であるはずの人物が現世への強い執着を抱いているさまを描くことによって、人間とは、いかに執着心が強いものであるか」を強調していると分析している。作者の創作の意図、あるいは撰者の編纂の意図に由来するという説、ともいえよう。

以上、中国通俗小説における悪僧説話の由来に関する従来の説

を概観してきた。悪僧説話が多い原因については様々に分析されているが、「淫僧」の話が特に多い理由については、いずれも説明されていない。

仏教界の墮落により、現実には「悪僧」が少なからず存在していたという歴史的事実が通俗小説の題材になったということは、大いに考え得る。また、「聖人」の「悪事」は人びとの興味を惹くということも事実であろう。では、なぜ「聖人」の中でも「仏教僧」が槍玉に挙げられ、なぜ「悪僧」の中でも「淫僧」が特筆されるのか。

以下、仏教における「戒律」と「淫」の問題を分析することによって、これらの問題点に光を当ててみたい。

四 「淫僧」の实在と仏教の「戒律」

仏教界における「淫僧」の存在は、中国明代に限った話ではない。仏教教団成立当初より、「淫僧」は存在していた。仏教の聖典、三蔵の一つである「律蔵」には、そうした「淫」を犯す比丘(僧侶)の話が数多く存在し、そのために作られた規則「律」もまた多いのであるが、まずは「戒」と「淫」の関係について検討してみたい。

(一) 仏教における「戒」と「淫」

「戒律」と一言でいうが、実際は「戒」と「律」は全く別個のものである。「戒」(シーラ)は罰則を伴わない自発的なものであり、道徳観念に近いものである。ただ、仏教ではこれは「業」に関わる非常に重要なものと考えられる。「戒」を犯すと、それが「悪業」となり、いつかはわからないが必ず「苦果」がやって来る。しかも、「意業」といって、それを「したい」「しよう」と思うだけでも「戒」

を犯すことになる。

ということは、最も基本的な戒である「五戒」(不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒)の中で最も持ち難いのは、「不邪淫戒」になるであろう。なぜなら、性欲は食欲や睡眠欲と合わせて人間の三大欲求に含まれることがあるほどの本能的な「欲求」であり、「種の保存」という生命の基本原則に関わる行為に結びつくものだからである。しかも、そのことを思うだけでも「悪業」になるということとは、生物としての本能を否定することに他ならない。

その点、「五戒」におけるほかの四つの「戒」は、本能と直接深く関わるものではない。仮に「殺したい」や「盗みたい」、「嘘をつきたい」という気持ちが起こったとしてもそれは「本能」ではないし、「酒を飲みたい」という欲望も、「本能」とはいえない。

理性だけではなく、本能も兼ね備えた生身の人間であるがゆえに、「戒」を重んじる仏教においては、「淫欲」は最大の問題なのである。

(二) 仏教における「律」と「淫」

一方、「律」(ビナヤ)は、罰則を伴う教団規則、いわば法律のようなものである。これは基本的に先程の「業報思想」や「戒」とは関係がなく、一般社会の、サンガ(仏教集団)に対する、「出家たる者こうあるべき」という理想を反映した、仏教教団が社会の中で維持運営していくために必要な規則であり、罰則も教団が与えるものである。

では、「律」における「淫」の位置付けはどうかというと、「戒」とはまた別の意味で、特に重要視されていると考えられる。「律」の中で最も厳しい罰則の教団追放になる罪「波羅夷法」の最初に、「いかなる女性とも性交してはいけない」という「不淨行法」が

挙げられている。

また「波羅夷法」の次に重い「僧殘法」では、前から四つが、「故出精」(故意に精を漏らしてはならない)、「自慰行為の禁止」、「摩触女人」(色欲の心で女性の身体に触れてはならない)、「与女人麁語」(色欲の心で女性に対してわいせつな言葉を語ってはならない)、「嘆身索供養」(色欲の心で女性に対して「こういふことをすれば良い功德があるであろう」などと言つてわいせつな行為を強要してはならない)という、「淫」に関する規則である。

なお、その次には「媒嫁」(俗世の人のために媒酌あるいはそれに準ずるような行為をしてはならない)という規則が続くが、これも、一種の「淫」に関する規則に分類できるかもしれない。

三番目に重い「律」には、「屏处不定」(人氣のない所で女性と同席してはならない)と「露处不定」(人氣のある所でも女性と性に関する話、あるいはそれと疑われるような話をしてはならない)という二つの「不定法」があり、これらも「淫」にまつわる規則である。

また、「律」の一種である『十誦律』の巻第四十九には、比丘が好んで行くべきではない場所として「童女・寡婦・婦・淫女・比丘尼・賊家・梅陀羅家・屠兒家・淫女家・沽酒家」が挙げられているが、その半数以上が女性に関する場所であることにも注目したい。

「律」においてこれほど「淫」に関する規則が重視されているということは、実際にそういった行為を行う僧侶が多く存在したということであり、逆に、出家者は「淫」に関する行為をするものではないという、一般社会における意識が強かったということも意味していよう。

(三)「戒律」と「淫」——仏教僧の理想と現実

仏教の「戒」および「律」と、「淫」の問題について検討してみると、仏教僧にとつては「淫」は最も犯してはならないものであり、また「淫」は最も犯しやすいものであったと考えられる。しかし、現実的には「淫」は人間の本性であり、「淫」から完全に離れるということは、「人間」をやめるということ、「生きていくこと」を放棄するということになりかねない。それこそが仏教で目指すところの「解脱」に繋がるのかもしれないが、それが容易ではないために、仏教僧は「淫」に悶え、「戒律」に苦しむであろう。だからこそ、悪僧に限らず、現実に「淫」を犯してしまふ僧侶が後を絶たないのである。

仏教僧にとつて、「淫」は最大のテーマである。仏教教団成立以来、仏教僧は「淫」に関して、犯してはならないという「理想」と、犯しやすいという「現実」の狭間に常に置かれていた。結果、悪僧の中でも「淫僧」が特に多数出現したと考えられる。

五 おわりに

中国明代の通俗小説に描かれた悪僧説話の形成が、当時の仏教界の墮落による悪僧の實在に由来するということが、悪僧説話が通俗小説の読者層に人氣があつた点に由来するということが、ともに事実であろう。でなければ、これほど多くの作品に悪僧説話が描かれるはずがない。ただ、「なぜ淫僧が多いのか」、そして「なぜ仏教僧か」という問題に関しては、やはり「戒律」から見た仏教における「淫」の問題抜きには説明できない。

「淫」に極めて厳しい仏教が、時代を経るに従つて、あるいは異文化の中に入流する過程において、より柔軟に変容していった

ことは周知の通りである。しかし、中国という異文化の中で変容を遂げた仏教においても、その根本的な教義は変わらない。「淫」に厳しいがゆえに、「淫」を犯す僧侶が後を絶たず、またその行為が目立つたのである。そして、その矛盾点を揶揄する意味も込めて、「淫僧」の話が通俗文学に多く描かれたのではなからうか。それを裏付ける証拠として、明代通俗小説における悪僧説話はそのほとんどが「勸善懲惡」の形で結末を迎える。この点については、日本の悪僧説話なども比較しながら検討すべき余地があるが、紙幅も尽きてきたことゆえ稿を改めることとしたい。

『水滸伝』第四十五回に「原來但凡世上的人情、惟和尚色情最緊」(およそ世の中の人の情というもので、坊主の色情ほど強烈なものはない)とあり、また『水滸伝』第四十五回や『金瓶梅』第八回では僧侶が「一箇字便是僧、兩箇字是和尚、三箇字鬼樂官、四字色中餓鬼」(一文字でいえば僧、二文字でいえば和尚、三文字でいえば葬儀屋、四文字でいえば色中餓鬼)と表現されているように、とりわけ明代においては、仏教僧はみな「淫僧」であるという通俗的な通念があつたようである。このことは、当時に限らず現代の仏教界にも通じる大きな問題であろう。我われ現代人は、中国明代の通俗小説に描かれた「悪僧説話」に何を見るべきか。本稿がそれを考えるきっかけとなれば幸いである。¹⁶⁾

注

- (1) 「悪僧」というと、日本では、中世における南都北嶺の大衆(僧兵)や、弁慶のような強い僧侶を指している場合が多いが、ここでは特に断らない限り「淫僧」を含めた「悪事を働く僧侶」という意味で用いる。
- (2) 「好漢」の定義およびその行いについては、拙稿「水滸伝」における「好漢」の概念」(『関西大学中国文学会紀要』第二十七号、二〇〇六)参照。

- (3) 原文は「他這和尚道人好生了得、都是殺人放火的人」、「這兩箇那里似箇出家人、只是綠林中強賊一般、把這出家影占身體」。なお、『水滸伝』の引用は百回本の『明容与堂刻水滸伝』(上海人民出版社、一九七五)に拠った。
- (4) 原文は「那和尚光溜溜一雙賊眼、只峻趁施主嬌娘、這秃驢美甘甘滿口甜言、專説誘喪家少婦。姪情發處、草庵中去覓尼姑、色胆動時、方丈内來尋行者。仰觀神女思同寝、每見嬌娥要講歡」。
- (5) 注(1)参照。

- (6) 拙稿「魯智深像の再検討(上)」(『千里山文学論集』第七九号、二〇〇八・三)、「魯智深像の再検討(下)」(同誌第八〇号、二〇〇八・九)。
- (7) 公案小説における悪僧の類話は他にもあり、先行する類話と重複する例もある。公案小説の成立過程については、池田正子「龍図公案」類話考」『中国文学研究』第四期、一九七八)、根ヶ山徹「龍図公案」編纂の意図」(『中国文学論集』第十四号、一九八五)、莊司格一「中国の公案小説」(『研究』一九八八)、阿部泰記「包公伝説の形成と展開」(汲古書院、二〇〇四)などを参照されたい。また、公案小説から悪僧説話を集めて邦訳したものに、浪野徹編訳『中国悪僧物語』(平河出版社、一九九〇)がある。

- (8) これら「三言二拍」に採られている悪僧説話の多くは、「夷堅志」や公案小説などの先行する作品に取材した話が多いが、先行作品の有無に関わらず、当時人口に膾炙した「三言二拍」の物語に登場する僧侶の多くが悪僧で、なおかつ「淫僧」が目立つということに注目し、これを取り上げた。

- (9) 正題「新輯出相批評僧尼孽海」。邦訳に土屋英明編訳『秘本 尼僧物語——中国性奇譚』(徳間文庫、二〇〇五)がある。
- (10) 孫楷第『中国通俗小説書目』(作家出版社、一九五七)の「僧尼孽海」の項に、「書中叙事、有萬曆年號、而崇禎間古吳金木散人所輯鼓掌絕塵第三十九回引此書、知書成在萬曆天啓間。云『唐寅編』者妄也」とある。
- (11) 土屋英明『中国艶本大全』(文春新書、二〇〇五)二〇〇九〜二一〇頁よ

り引用。

- (12) 中国近世における仏教界の墮落については牧田氏の研究のほか、龍池清「明代に於ける売牒」(『東方学報』東京、第十一冊之二、一九四〇)、大藪正哉「元代の度牒に関する規定」(『中国の宗教と社会』、不昧堂書店、一九六五)、塚本善隆『中国近世仏教史の諸問題』(『塚本善隆著作集』第五卷、大東出版社、一九七五)、高雄義堅『宋代仏教史の研究』(百華苑、一九七五)、竺沙雅章『中国仏教社会史研究』(同朋舎、一九八二)などを参照。

- (13) 原文は以下の通り。「市民们感兴趣的不是佛法的奥义、禅师的机锋、头陀的苦行、反倒是僧人好勇斗狠、犯法破戒、淫欲横流。」

- (14) 『古今小説』第四卷「閑雲庵阮三償冤債」などに、尼僧が男女の逢引の手助けをし、尼寺がその密会の場所に使われるという話がある。「媒嫁」が「淫」に相当するならこの尼僧も「淫僧」ということになるが、今回は実際に淫行に及ぶ僧侶や尼僧に限定して「淫僧」と呼ぶことにした。

- (15) 仏教における「戒律」と「淫」の関係については、『大正新脩大藏経』第二二～二四卷「律部」(同刊行会、一九二五～一九二六)、平川彰『律藏の研究』(山喜房仏書林、一九六〇)、小川貫弑『近世中国仏教における戒の変容』(日本仏教学会編『仏教における戒の問題』、平楽寺書店、一九六七)、土橋秀高『戒律』の研究』(永田文昌堂、一九八〇)、佐々木閑『出家とは何か』(大蔵出版、一九九九)などを参照した。

- (16) 中国における悪僧説話は明代以前にもわずかに存在する。例えば、宋代の『夷堅志』に見られる僧侶の話には、『夷堅丁志』卷第十四「武唐公」、『夷堅支乙』卷第六「永悟侍者」、『夷堅支景』卷第三「王武功妻」、『夷堅支戊』卷第九「嘉州江中鏡」、『夷堅志再補』「義婦復仇」などがあるが、その中で「淫僧」の話は「王武功妻」と「義婦復仇」の二話、その他の「悪僧」の話は「嘉州江中鏡」一話(いずれも本稿で挙げた「三言」に類話がある)のみである。通俗小説の興隆が明代以降という事実も影響しているであろうが、悪僧説話が最も目立つのが明代であったため、本稿では「明代通俗小説」に限って論じた。なお、大木康『明清文学の人びと

——職業別文学誌』(中国文芸叢書、創文社、二〇〇八)第十章に挙げられているように、馮夢龍『笑府』などの笑話の中にも「淫僧」を嘲笑した話が見られる。